

かたりべ133

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

うつし世はゆめ…？ ～京極夏彦氏記念講演会レポート～



京極夏彦氏 (小説家)
(2019年8月10日 撮影・豊島区)

八月一〇日(土)、企画展「暗がりから池袋を覗く」ミステリ作家が見た風景」の関連イベントとして、小説家の京極夏彦氏による記念講演会を開催しました。当日は猛暑の中、一七名の方にご参加いただきました。

講演の冒頭では、妖怪やお化け以外の内容で講演することとはほとんどなく、ミステリの話はあまりしたことがないと話されていました。『ミステリとお化けの共通項』というテーマから、民俗学者と推理小説に登場する探偵は似ているというお話がスタートしました。『姑獲鳥の夏』執筆時のエピソードや、池袋の地名の成り立ちなど、様々な視点から、ユーモアを交えながらお話が展開されました。

江戸川乱歩の小説についても触れ、「自分の見ているものを具現化するのにふさわしいものだけを選び取って書いていたはず」「そうでなければ(読者は)簡単には騙されない」と述べられていました。講演の最後には「作品を読むときは没頭しましょう、その作者に騙されましょう、そして面白いと思ったら忘れましょう。その作品が現実だと思ふことはやめてください」と呼び掛けられました。乱歩の有名な言葉「うつし世はゆめ 夜の夢こそまこと」にも通じる部分があるように感じられました。

京極先生には、お忙しいなか、ご講演を引き受けていただき、ありがとうございました。

(文学・マンガ 佐伯百々子)

企画展「暗がりから池袋を覗く」ミステリ作家が見た風景」は九月一四日(土曜日)まで開催しております。

開館時間…九時～一六時三〇分 月曜日休館

作品を見る読む 17 田中寿々

《青銅両耳花瓶》(図1)、《鑄銅花瓶》

(図2)は豊島区で所蔵する鑄金工芸作家、田中寿々(一九〇三・二〇〇一、以下寿々)の作品です。(図1)は、余分な装飾を控え洗練された緩やかなフォルムが優美で神聖な雰囲気をもたらしています。古代中国に由来する伝統的な銅製花器におけるシンメトリーの形が意識されています。どっしりと丸みを帯び重厚な(図2)は国宝・絵画銅鐸(桜ヶ丘5号銅鐸、神戸市立博物館蔵)に描かれた絵を彷彿とさせる、脱穀をする人々と、その周囲で踊る人、笛を吹いているように見える人の絵が花瓶の前表面に、蹴彫りで打たれています。のびやかな鑿痕です。フォルムは簡素ながら重厚で乱れない均



《青銅両耳花瓶》(図1)

一さがあり現代的な印象を醸しています。

これらの作品から、寿々は作品によってブロンズの色合い、色付けを使い分け、また古くからの銅器の歴史を尊重し、現代的に咀嚼し制作していたと推測されます。

群馬県出身の寿々は当初作家ではなく、同郷の鑄金工芸家である森村西三(二八九七・一九四九)の妻として池袋にやってきました。一九二四年に借家住まいをはじめ、寿々は西三の制作を手伝い、鑄金の蠟型や細工等の基礎技術を身につけました。三年後、西三は帝展入選し、一九二八年、巢鴨村大字池袋字丸山(現・西池袋五丁目)に移り鑄造工場が併設する家を構えました。森村家の近所には江戸川乱歩(二八九四・一九六五)をはじめ、文士や芸術家、政治家が多く、地域で組織された池袋丸山町会では盛んな交流があったようです(江戸川乱歩『探偵小説四十年』桃源社 一九六一年)。この町会は戦後緩やかに、芸術家たちの集まりとして豊島文人会となります。

太平洋戦争が本格化すると、金属供出のために材料の入手は困難になり制作

は断たれ、住居は空襲で焼失。西三は一九四九年に病死という苦難の末、寿々は自宅の焼け跡にひとり住居兼アトリエを建て直し、自ら鑄金家を志すのです。四六歳頃のことでした。東京藝術大学で教鞭をとりアールデコ調の鑄金を得意とした内藤春治などに指導を受けて、日展に出品します。一九五一年に《鑄銅花瓶》の日展入選を経て、暗れて鑄金作家となったのです。珍しい女性の鑄金工芸家は、精巧な鶯香炉(東京国立博物館蔵)が有名な江戸時代後期の伝説的な女性の鑄金家、津村亀女になぞらえて「昭和の亀女」とすら呼ばれました。

一九五五年、豊島区美術家協会を知り合った洋画家の田中佐一郎(一九〇〇・一九六七)と再婚すると、生活の中心は自身の制作より、佐一郎を支えるものとなります。再び制作に入るのは佐一郎に先立たれた後の一九九三年のことです。西三、佐一郎と二人の夫の裏方にま

わる期間がその生涯の大半を占めたために、寿々が「作家」として活躍したのは非常に短期間です。加えて多くの作品は行先が判然としていません。そうした事情から作品はもとより、鑄金家・田中寿々はあまり知られていません。しかし今日機運が高まり、群馬県立近代美術館

の「没後70年 森村西三とその時代」展(二〇一九年九月二日～二月一日)に当区所蔵の寿々作品二点を貸出予定となりました。西三の作品と寿々の作品が一時に並ぶこの貴重な機会にぜひ現地まで足をお運びください。

寿々は自伝『さゝ舟』で当時女性の鑄金家は自分ひとりしかいなかったと書き残しています。確かに戦前、鑄金を学べる東京美術学校(現・東京藝術大学)で入学が許されたのは男性のみ。戦中は金属供出により金工の芸術分野は活動ならず、その鑄造の知識、大掛かりな設備を必要とする鑄金は気軽に始められるものではありませんでした。そのような時代背景において、鑄金作家として活動した女性、寿々の存在は稀有としても過言ではないでしょう。(美術 堀口 麗)

【参考文献】田中寿々『さゝ舟』サンライズ社、一九九三年



《鑄銅花瓶》(図2)

連載「絵はがきは語る」(12) 豊島区の社会事業施設の草分け 家庭学校

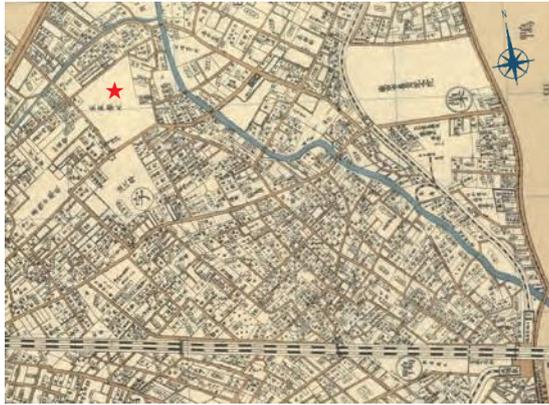
豊島区域の都市化は、明治一八（一八八五）年品川・赤羽間の鉄道開通に始まります。同年に目白駅が開設し、三六年に池袋駅、大塚駅、巣鴨駅、四三年に駒込駅が開業します。沿線では徐々に宅地化が進みますが、多くはまだ田畑が広がる近郊農村地域でした。

明治中期以降、豊島区域には寺院・墓地、監獄が東京市域から移転してきましたが、学校や社会事業施設が多く移転・設立したことも、豊島区域の都市化の特色といえます。とくに巣鴨村（大正七・一九一八年西巢鴨町と改称）には社会事業施設が集中していました。

業施設が集中していました。

『巣鴨総攬』大正一四年発行には、家庭学校（明治三二年創立）、瀧乃川学園（明治三九年滝野川村より移転）、癡兵院（明治四一年渋谷村より移転）、東京市養育院巣鴨分院（明治四二年開設）、桜楓会巣鴨託児所（大正四年小石川区より移転）、杉山鍼接学校（大正四年創立）、マハヤナ学園（大正八年創立）、北豊島工員職業紹介所（大正八年開設）などが紹介されています。そのほかに至誠学舎（大正元年設立）、雲雀谷自由学園（昭和元・一九二六年創立）などの施設もありました。

なかでも明治二四年に石井亮一が創立した知的障害児者のための滝乃川学園と、明治三二年に留岡幸助が創立した家庭学校は、東京における児童保護施設の嚆矢であり、田村直臣が設立した自営館（明治二七年芝区より移転）とともに、キリスト教信者による社会事業施設の草分け的存在といえます。



★が家庭学校。南隣は渋沢家別邸。北から南に谷端川が流れる。地図下の線路は山手線で、右端に大塚駅がみえる。「西巢鴨町東部事情明細図」昭和2（1927）年（部分）

家庭学校創立二十年記念の絵葉



①正門 敷地の西側にあった。樹木が鬱蒼と茂っているのがわかる。



②校長宅 敷地内の茅屋で開校し、留岡家と教師1名、生徒1名が寝食を共にした。



③実業 学校では農業、園芸、木工、西洋洗濯などの実業を重視した。

書（五枚一組）です。留岡幸助は、北海道知集治監の教誨師としての体験から、犯罪予防のために不良少年を保護教育する感化事業の必要性を痛感し、米国で研究視察の後、北豊島郡巣鴨村大字巣鴨（現上池袋一―三七）の三六〇〇坪の敷地に家庭学校を創立します。留岡は少年不良化の原因は境遇にあるとし、巖本善治（明治女学校長）の斡旋により、都会の雑踏を避け、土地が広く、自然が豊かな巣鴨の地を選んだのです。

留岡は、校名の通り、生徒たちと生活を共にしながら、家庭の愛情をもって勤勉、独立、正直、清潔の四大主義のもと、職業を授け、徳育、智育、体育、宗教を

施しました。

明治三五年には雑誌「人道」を発行し、同三七年には日本初の慈善事業師範部を設け、従事者の養成に努めました。

明治四二年には東京府代用感化院に指定され、さらに大正三（一九一四）年には北海道紋別郡社名淵に分校と農場を設立し、大自然での感化教育に取り組みます。絵葉書が作成された大正八年の巣鴨本校の入学者総数は三六一名、改善卒業生二四四名、在校生は五九名でした。

昭和九（一九三四）年、留岡が七〇歳で死去すると、家庭学校は土地を癌研究所及び付属治療所に譲渡し、杉並区に移転しました。現在、上池袋東公園内に教育委員会の説明板「家庭学校跡」が建てられています。（郷土 横山恵美）

豚は夏の風物詩!?

—蚊遣と蚊遣豚の活躍—

夏の暑さが続きます。蒸し暑い季節にブーンと人を苛立たせるあの虫に対して活躍する夏の風物詩といえ、可愛らしく豚を模した道具を思い浮かべる人も少なくないのではないでしょうか。陶製の豚の口からゆらゆらと上がる蚊取り線香の細い煙。昨今では見る機会も少なくなりつつあるこの道具は「蚊遣豚」といいます。

蚊遣とは、蚊やブヨを追いかけるために焚くもの、あるいはそれらを焚くことを指し、夏の季語でもあります。スギ・マツなどの大鋸屑やカヤ・クスの小枝、ヨモギなどの生草、落ち葉が用いられ、江戸時代後期にはカヤを束ねたものが蚊遣木として売られていました。これらは蚊遣台と呼ばれる陶製の容器に入れて焚かれていましたが、その蚊遣台の一種が蚊遣豚なのです。

なぜ蚊遣を焚くための台が豚を模して作られたのでしょうか。発祥ははっきりとわかってはいませんが、江戸時代に徳利を加工して作った蚊遣台が豚に似ていた説、養豚場で土管を使い蚊遣を焚いていたところ、煙が広がり過ぎてしまつた

め、口を狭めたものを作つたら豚のような形になつた説、火伏せ信仰で知られる愛宕神社の神使である猪を模した説など様々な説があるようです。徳利説については、実際に新宿区内藤町の遺跡より一九世紀前半のものと思われる徳利から作られた蚊遣豚が出土しています。全長約三五センチほどの大きさで、たくさん蚊遣を入れることができたのではないのでしょうか。

蚊遣が蚊取り線香へと移り変わつていったのは、明治時代に入り殺虫効果のある防虫菊が用いられるようになってからでした。当時は棒状の線香に防虫菊を練り込んだものが開発され、やがて燃焼時間を延ばすための工夫として現在のような渦巻状の蚊取り線香が主流となりました。

郷土資料館所蔵の蚊遣豚(写真1)は、昭和二〇年から四〇年頃まで使用されていたもので、三重県四日市市の萬古焼(ばんこやま)と思われまふ。萬古焼は耐熱性に優れていることから、蚊遣豚以外にも急須や土鍋などが多く作られています。肌色の胴体にあたる部分は素焼きのような材質で、

口縁部や背部には緑釉が塗られています。おしりにあたる部分は蚊取り線香を入れるため広く開けられていますが、内部が黒く煤けており(写真2)、家庭で長く使用されてきたことがわかる資料です。

現在は火を使わない電気式蚊取り器も普及していますが、それでも蚊取り線香は屋外などで根強く使われ続けています。また、蚊遣豚の形を模した電気式蚊取り器も販売されています。暮らしのなかで使われる道具は、時代背景や環境の変化に伴って形状や使用方法が徐々に移り変わっていくものですが、人々の記憶のなかには、蚊取りといえはあの豚、というイメージが深く刻み込まれているのかもしれない。(郷土 岩崎茜)



編集後記

まだまだ残暑が厳しい日々が続きますが、いかがお過ごしでしょうか? 『かたりべ』一三三号をお届けいたします。現在企画展示室にて、文学・マンガ分野の企画展『暗がりから池袋を覗く』ミステリ作家が見た風景』が開催中です。八月一日には、小説家、京極夏彦氏による記念講演会も行われました。多くのご応募を頂き、大盛況のなか記念講演会を執り行うことができました。企画展は九月一四日まで開催中です。是非一度、足をお運び下さい。郷土資料館では、収蔵庫移転作業のため、資料の梱卸作業を行っています。現在、旧第十中学校をはじめとした廃校を資料の収蔵場所として利用していますが、老朽化が大きな課題となっています。実際に旧第十中学校は取り壊しが決定しており、保管されている家具や農耕具などの大物資料から玩具のような掌におさまるような資料まで、二万点を超える資料を新たに建設する収蔵庫へ移動させる必要があります。今後も進捗状況をご報告させていただきますので、引き続きご愛読のほどよろしくお願いたします。

(編集 水吉雄人)



かたりべ
No.133

2019年8月30日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>